

## 5. 女房との二人旅

開聞岳 霧島山 阿蘇山 祖母山 九重山(69)

岡崎信用金庫に勤めていたときに、1週間の強制休暇制度が導入された。もし当事者が不正を働いていたらこの1週間の不在期間中に不正が表面化するであろう、というのが狙いである。

これは役員にも適用されたので、この1週間を利用して、九州の山を女房と2人で歩くことにした。

1日目、業務終了後岡崎を出発。女房とは小生が200km運転したら女房が100km運転するというルールを作った。東名高速を西に向けて走ると広島県に入るあたりで眠気も出てくる。その時はPAに車を止め、後部座席を倒しベッドにして寝袋を広げるとゆっくりと眠れる。

2日目は明るいうちに指宿の南にある開聞町に着く。ここだけは宿を予約しておいた。

3日目は朝一番で開聞岳に登山。登山道というものは、直登かジグザグについているものだが開聞岳の登山道はサザエの貝殻のようにぐるぐると巻きながら上がっていく。頂上に着くまでに周囲360度の景色を見ることができる。この山には沢筋がない。

開聞岳は九州の南の端にあって、富士山と瓜二つだ。太平洋戦争の末期日本軍の特攻隊は鹿屋、知覧の飛行場を飛び立ち、開聞岳を富士山に見立てて「さらば日本」と言って南の海へ飛んで行ったそうだ。開聞岳の頂上ではそんな光景が目に見えぬ。

山を下りたらすぐに霧島えびの高原へ。

4日目。霧島山というのは霧島連山の総称である。深田久弥は霧島山の項では高千穂の峰について多く書いているが、解説書では霧島連山の最高峰である韓国(からくに)岳を百名山の対象としている。大雪山とか穂高などいくつかの山を総称で呼んでいるときにはそれらのうちで最も高い山を代表としているようだ。韓国岳の名前は、その昔朝鮮から渡来した陶工が一番高いところまで上がって祖国を偲んだことに由来すると書いてあった。

4日目に泊まった場所を覚えていないが、5日目には祖母山に登った。祖母山は、昔は九重山よりも高く、九州の最高峰とされていたのでウェストン(日本アルプスの命名者)も祖母山に登っている。ただ、深田久弥が「火を噴く阿蘇、高原の美を持つ九重、とていりつしながら、祖母はあまりにもつつましい」と言うように祖母山は目立たない存在だ。我々が登った時も雪に踏み跡はなく、誰ひとりにも会わなかった。

6日目は阿蘇山である。深田久弥が「東西四里、南北六里という広さは、やは

り想像では実感が来なかった」と書いているように阿蘇のスケールは想像を超えている。また阿蘇山という名のついた山もない。阿蘇五岳のうち中岳と最高峰の高岳に登ったが、登山と言うよりも観光地の散歩の域を出ないように思った。もっとも高岳からの仙酔尾根の下りはぼろぼろに崩れた火山灰の急坂で女房は悲鳴を上げていた。

7日目の九重山は、牧の戸峠に車を置いて久住山を往復したが、猛烈に濃いガスの中、どろどろにぬかるんだ登山道に苦勞したので登頂したという喜びは全くない。下山後、前日泊まったホテルに戻って靴の泥を落とさせてもらって帰路についた。

もし次に九州に行く機会があったら、由布岳とミヤマキリシマの時期に坊ガツルに行きたい。

#### 岩木山、八甲田山、八幡平、岩手山、早池峰(74)

午前中に山に登って午後には次の場所に移動する、という忙しいサラリーマンスタイルの山登りを東北でもやってみた。この時も女房につきあってもらった。

青森の白神岳は百名山に入っていないがブナの原生林が広がる光景を見たかったので、まず白神岳に向かった。残念ながら白神では天気が悪くてこの光景を見られなかったが、次に登った岩木山からは濃い緑のじゅうたんを敷き詰めたようなブナの原生林を見渡せた。

岩木山は八合目まで車で上がれる。忙しいサラリーマン登山では躊躇なくマイカーを使って時間を節約したが、津軽の象徴としての岩木山の重みを感じられない。下山後すぐに八甲田の酸ヶ湯温泉に向かった。

八甲田山の語源は、八つの峰とその間に地塘(田)が点在する様、だそうだがガスが濃くて全体像が分からない。登山道は緩やかに上り下りしているが自分の位置がはっきりしない。大岳頂上という標識を見て八甲田山に登ったことを確認した。

明治時代の日本陸軍の大遭難は猛吹雪の中でホワイトアウトの状態だったのだろう。濃いガスの中で思い出した。

八甲田から八幡平に向かう車から、料理をセールスポイントに挙げているペンションを選んで予約した。この宿の食事は看板通りおいしいフランス料理で、小生は特に川魚料理が気に入ったし家族的な雰囲気も良い感じだ。女房も賛同したので、ここに3連泊することにした。

八幡平の1日目は、八幡平に登った。正確に言えば八幡平に車で出掛けたと言うべきかもしれない。なにせ車を降りて観光客と一緒に10分か20分も歩くと展望台があつてここが頂上だという。あとは大湿原。苗場山と肩を並べるく

らいスケールが大きい。現在ではここを山として"名山"のジャンルに入れてよいものだろうか考えてしまう。

八幡平の 2 日目は岩手山。ここは午前中に往復とはいかない。一日がかりの山だ。南部富士と呼ばれるように形が富士山と同じであるうえ、活火山なので上部は火山灰に覆われ樹木が育たない点も共通している。頂上からの展望は見事なものだ。東北北部の土地勘に乏しいので、岩木山くらいしか分からないが岩手、秋田、青森の山は全部見えていたと思う。

八幡平の 3 日目は、早朝に出発して早池峰に向かった。早池峰は、岩木山や岩手山のようななだらかな火山とは違って、ごつごつした岩山である。その典型が「天狗の滑り岩」であろう。大きな一枚岩で鉄製の梯子がかかっている早池峰の看板になっている。

頂上の早池峰神社奥宮に宮司さんが来ていたが、登山客は我々二人だけ。天気には恵まれたが、何か物さびしい雰囲気だった。

早池峰を下山してからは宮古に泊まって、おいしいホヤを頂いた。

#### 磐梯山 安達太良山(76)

小生の父が会津の出身で小生も太平洋戦争の時に疎開していたし、まだ親戚筋が住んでいるので、会津には地縁がある。会津に出掛けても直行直帰が多かったのだからたまには寄り道をしようと思って、会津若松に一泊して磐梯山に出掛けた。

マイカーで行ったので八方台登山口を使うことにした。磐梯山の西側から樹林帯を登ることになる。この道からは桧原湖等の裏磐梯や猪苗代湖など遠くの景色は見渡せるが、大爆発の後の火口壁や南面の沼ノ平はよく見えない。磐梯山は南北に縦走するルートが良さそうだ。

4 時間ほどで頂上を往復してすぐに裏磐梯を東に向かった。観光地とはいえ平日なので思い通りに車を走らせられ、奥岳温泉のロープウェイ山麓駅に到着。ロープウェイの山頂駅から安達太良山の頂上は 1 時間ちょっとの大した距離ではないが、ロープウェイの最終便の時間までには帰りつきたいので、懸命に急いだ。女房も少し遅れながらも良く頑張った。

頂上ではゆっくりもできず、眺望もほとんど覚えていない。ロープウェイの時間には間に合い岳温泉で汗を流すことはできたが、急ぎすぎたと反省している。

#### 伊吹山(77)

東海道新幹線で西に向かう時、必ず目を凝らしてみる山が 3 つある。まず丹沢の大山。2 番目が富士山。3 番目が伊吹山である。この山を見るために座席は

いつも山側である。伊吹山にも早く登りたいと思っていたが、日銀時代の勤務地の東京、札幌、大阪、岡山からは遠くてわざわざ出掛ける気になれない。ついつい後回しになってしまった。

岡崎信用金庫に移ると、伊吹山は身近な存在となり、女房とドライブがてら出掛けた。最初は登山口から登ろうかとも考えたが、頂上直下の駐車場が車と観光客であふれている情景を思い浮かべると歩く気がなくなり、マイカーにした。

伊吹山は花の山、と言われているが、車を降りてから 1 時間余りの散歩でも結構花を見ることができた。それに日ごろ見慣れていない高所からの琵琶湖、鈴鹿の山々が見えたのがうれしい思い出である。

### 剣山(78)

四国第 2 の高峰、剣山は縁の薄い存在だった。深田久弥が「西の石鎚山が山骨稜々として厳父的なのに対し、東の剣山は豊かなふくらみをもって慈母的である」と書いているが、本当にこの通り、剣山は山というよりなだらかな丘である。それだけ登山という目で見ると魅力に乏しかった。

そんなわけでわざわざ登りに行くことはないと考えていたところに幸運が舞い込んだ。京都の村田製作所の非常勤監査役をしているときに、週末の金曜日と翌週初の月曜日に会議がセットされ、あいだの土、日には自宅の東京往復というスケジュールが組まれていた。東京に用事もないので四国に渡って剣山に登ることにした。

剣山は観光リフトを使うと、ほんの 1 時間ほどの登りで頂上についてしまう。実質的にハイキングなので女房も同行することになった。

金曜日の夕方、高松に入って、土曜日の朝からレンタカーを借りて、片道 50km くらい走った。土地勘は全くのゼロだが、カーナビがリードしてくれるから楽である。剣山は想像していたとおり草原のハイキングだったが車の運転で気疲れしてしまった。

### 四阿山、美ヶ原(80)

慶応のアルペンクラブでは、上高地の閉山祭の頃に上高地で納会を開いていた。上高地は四季それぞれに良いところだ。秋の上高地は落ち葉をサラサラと鳴らしながら散歩するのが素晴らしい。女房も秋の上高地が気にしていたのでよくこの納会に参加していた。

女房と一緒にいくなら車でも良かろうとマイカーで出掛けた。上高地まで車で行けば帰路はまっすぐ帰宅するのはもったいない。どこかに寄ろうと考えて、四阿山に登ることにした。

上高地を朝一番のバスで沢渡まで下りて、午前中には菅平牧場の登山口から歩き始めた。秋も深まり天気もいまいちの午後、誰ひとりいない牧場脇の登山道をひたすらに登り、日が落ちる前に下山したいと願いつつ、頂上を往復した。

マイカーに戻った時にはまだ明るさが残っていたのでほっと胸をなでおろしたが、同時に四阿山になにか失礼な登り方をしてしまったような気がしてならなかった。

四阿山と同じように上高地での納会の帰りに立ち寄った山に美ヶ原がある。四阿山は駆け足で通り過ぎてしまったが、美ヶ原は由緒ある山本小屋に泊まり、翌朝高原をひと通り歩き回った。

深田久弥は「美ヶ原」という原を百名山に入れた理由について、明治時代になって高原と言う呼び方が生まれたが、その呼び方に最もふさわしいところがこの美ヶ原だという。高原とは、高さと広さの両方が備わっている必要がある。美ヶ原は「大体二千メートル前後の高度を保って豊かに起伏している原で」「全く桁が外れて広い」日本一の高原である、という。

その高原の真ただ中に山本小屋がある。この小屋は、美ヶ原をこよなく愛し、開拓した山本俊一・峻秀父子が開設した由緒ある山小屋だ。早朝小屋の外に出るとひんやりした高原の空気と広い緑の牧場。遠くに北アルプスの山並みが見える。確かに最高の高原である。

## 月山(81)

大学生の頃、千歳高校山岳部の **OB** が勤務していた会社のそばに「月山」という居酒屋があり、ここで「月山」というお酒を飲みながら、山行の打ち合わせをやっていたので月山という名は頭にこびりついていて、その後、テレビの放送で出羽三山には今でも山岳宗教が生き続けている、と紹介されていたのも印象に残っている。

ただ、宗教色が強い割に山登りの観点からはあまり魅力を感じなかったのもそのうちに機会があつたら登ろうと考えていた。何時のことだったかよく覚えていないが、米沢観光とセットでドライブがてら女房と出掛けた。まず湯殿山神社に参詣したが、神社の鳥居が素晴らしく大きくて、現在でも大勢の人を集める力を持っている宗教だと認識を改めた。

湯殿山神社から月山頂上までは 3 時間くらいの緩やかな登り。苦もなく登り切ってしまうと、頂上は月山神社の境内になっていて、いくばくかの参拝料を取っている。小生は強制的に参拝料を払わせられることに違和感があるので、頂上の手前 5m のところで頭を下げて登頂したことにした。

## 会津駒ヶ岳(82)

深田久弥は頂上部の全体像が見えたときに「どこが最高点か察しかねる様な長大な山が伸びていて、それがおびただしい残雪で輝いている。会津駒を天馬の疾駆するさまに見たのはその時である」と書いている。駒ヶ岳という名は残雪のかたちを見て名付けられた山が多いが、会津駒ヶ岳は残雪期の山のかたちから駒ヶ岳と名付けられたと解釈したのである。

小生は秋の紅葉の時に登ったのでカラフルな衣装をまとった馬だった。登山計画としては駒ノ小屋で1泊してゆっくりしようかと考えていたが、登山中に大きなパーティーを追い抜いたが、その連中が駒ノ小屋に泊まるようなことを話していたので、我々は駒ノ小屋に泊まることを断念。尾瀬の御池に泊まることにして桧枝岐に下山した。

これが幸い。桧枝岐から御池までの道路の両側の樹木が黄色を中心にして見事に色づいて風に吹かれて揺れ動き、舞っていた。その美しさは何とも形容しようもなかった。

### 大菩薩岳(83)

大菩薩峠とか机竜之助という名前は大人の会話の聞き覚えで子供のころから耳に残っていた。大菩薩峠とはとても凄味のある名前なので、忘れられない。

山に登るようになって大菩薩峠の場所や難易度を知りようになっても出掛ける気になれなかった。なぜなら中央線沿線でも相模湖あたりまでは日帰りの範囲だが、山梨県と聞くと1泊するような遠いところだと思ってしまう。名前の凄味ほどには恰好いい山とは思えなかったこともある。

深田久弥の百名山でも、山そのものではなく中里介山とか樋口一葉等を通して有名になり、取り上げられたように感じてしまう。

現在の大菩薩岳は上日川峠まで車が入るので、女房とハイキングのつもりで歩いた。

### 両神山(84)

両神山について深田久弥は「ギザギザした頂稜の一線を引いているが、左右はブツ切れている。あたかも巨大な四角いブロックが空中につき立っているような、一種怪異なさま」と書いている。関越自動車道を走るたびに両神山を見て深田久弥は大胆な言葉を使って上手に表現したものだとその都度感心してしまう。

両神山の名前の由来については、二つの神様の意味ではなく、ヤオカミ(八つの頭を持つ竜王)がヨウカミになり、ついにはリョウカミとなって両神の字があられたと紹介している。

百名山を歩いて、実質的に入山料を払って登ったのはこの山だけだと思う。

白井差新道を使って登る時には、環境整備料 1000 円を支払う必要がある。ここが私有地であり、細かいところまで気を遣って整備してあるので整備料を払ってくれというのだ。とても歩きやすいし短時間で登れるのでとんでもない料金を払わされたとは感じなかった。丸木橋がとても歩きやすかった、というのは女房の感想である。

### 吾妻山(85)

吾妻山とは「福島、山形の両県にまたがる大きな山群」と深田久弥は書いているが、山群の中でどの山を代表選手とするかについては絞り切っていない。ただ最高峰の西吾妻山を代表とすることについては大方の認識が一致しているように思う。

小生も女房とこの西吾妻山に登ることにして、猪苗代から裏磐梯を突っ切って山形側の白布（しらぶ）温泉に入った。白布温泉からスキー用のロープウェイとリフトを乗り継いで北望台まで上がると頂上まであと標高差 200m しかない。それもなだらかな斜面である。2 時間も歩けば頂上だが、頂上は樹木に囲まれた小さなスペースにポツンと標柱があるだけで見晴らしもきかない。登る苦労がなかっただけに感動もない。

山を下りて白布温泉に泊まったが、吾妻山は大きな山群の総称だが、火山情報が「吾妻山」ということで発表されるため、入山規制のかかっている一切経山や吾妻小富士と一緒にされてしまい商売に影響している、と宿の御主人はぼやいていた。